富山文学の会発足あれこれ

黒﨑　真美

二〇〇七年に日本社会文学会の全国大会が富山大学で開催された。その開催実行委員の依頼としてその年の四月にお電話をいただいたのが、そもそものきっかけだった。二〇〇二年に富山に移り住んできて、文学研究に触れる機会が少ないことに寂しさを募らせていたので、この依頼の連絡は大変ありがたかった。富山大会は十一月十日から十二日まで三日間開催し、最終日の文学散歩では岩瀬から水橋、魚津の米騒のモニュメントや横山源之助の顕彰碑、最後は横浜事件につながる旅館紋左を巡った。この日本社会文学会の富山開催が、金子幸代さんとの初対面だった。

金子さんとの知己を得てから、東京での文学研究会でも親しくお話するようになった。その際に、仕事や育児のために遠方で開催される文学研究会に参加できないもどかしさを語り、地元に文学研究の会がないことを嘆き、ぜひ地元富山で研究の場を作ろうと持ち掛けた。それが実現したのが二〇〇九年九月であった。

初回の発足会議は、金子幸代さんが丸山珪一さんや萩野恭一さんに声を掛けてくださって、私を含めた四人で総曲輪のオレンジシャリマティに集まった。ちょうど富山県ではふるさと文学推進の気運があり、県の推進事業として補助金交付の予算が組まれていた。そこで、「富山の文学の発掘と紹介」をテーマの一つに掲げて、文学研究会を作るために県内在住の文学研究者や文学に関わる方にお声がけをした。十月の顔合わせに参集してくださったのは、発足会議参加者の四人の他に桂書房の勝山敏一さん、富山高等専門学校の高熊哲也さんと近藤周吾さん、当時はまだ院生だった今村郁夫さんだ。さらに瀧澤弘さんが加わった総勢九名で、富山大学を活動拠点にして、代表金子幸代さん、副代表丸山珪一さん、事務局黒﨑真美で富山文学の会が動き始めた。

発掘と紹介のために、二か月に一回の研究会・公開読書会や、年一回のシンポジウムの計画、報告書の作成などの活動の骨格を定め、実際の研究会として機能し始めたのは三回目の十二月からだった。例会を通じて、小寺菊子や堀田善衛、瀧口修造、三島霜川、源氏鶏太、横山

源之助など、これまで触れることのなかった作家や作品に出会った。江戸川乱歩や与謝野晶子、泉鏡花、室生犀星が富山を描いていることを知った。大正から昭和にかけて富山を中心に詩作が盛んにおこなわれていたことを知った。研究報告があるたびに未知の作家や作品に出会い、富山は決して文学不毛の地ではないことに驚喜した。〈富山〉という切り口で想像していた以上に世界が広がり、文学研究の面白さを再確認し、文学に親しむ喜びを感じた。また、公開した読書会や大会には大勢の方がご参加くださり、県内の文学研究者や文学愛好者と知り合うことができたことも、富山文学の会発足の収穫の一つである。

県への報告のために作った報告書が五回、それを引き継いで作った機関誌『群峰』も今回で五号を数える。『報告書』には富山ゆかりの作品とその解説を載せ、いずれは作品集にまとめる計画もあったが、立ち消えになっていることには、悔いが残る。『群峰』を創刊後には、学術機関リポジトリに登録したり、ホームページを作成したり、インターネットを通じて富山文学の会から発信する試みも続けている。

大会の開催は今回で十回目である。例会すべてを数えると六十九回の会を重ねてきた。発足当初九名だった会員は、現在多くの学生の参加を得て三十五名である。会員はそれぞれに多忙の中でも、時間を作って例会に集まってくださっていることに敬意を表する。

研究者が少ないと思っていた富山の地で、気が付いたら分野の違う研究者や各専門分野の第一人者が集まる会になったのは嬉しい誤算である。残念なのは若い研究者や愛好家の少ないことだ。それでも、これからも地道に活動を続けていくことで、さまざまな方法論と出会ったり、多方向からの思考を吸収したり、異なる意見の交換をしたり、それぞれの研究の試論をする場であり続けられたらと思う。